学芸活動だより　第145号

ふるさと奥尻通信

令和7年12月26日
奥尻町教育委員会発行
事務局:01397-2-3890

海洋研修センターと稲穂ふれあい研修センターにて無料配布しています。 奥尻町役場ホームページからもダウンロードできます。

巻頭言

『日本書紀』斉明天皇六年、阿倍比羅夫北航記事に登場する「渡島蝦夷」が擦文文化人、「粛慎」（あしはせ）がオホーツク文化人、その根拠地「弊賂弁島」が奥尻島だったのではないか。そのような解釈、説がある。その真相解明につながるような発見を目指したい。

特集　シンポジウム「勾玉と奥尻島」の要約①

10月26日に青苗遺跡から発見された勾玉に関するシンポジウムを開催しました。今号では当日に各先生方が発表した内容を発表順に極々簡単に紹介します。

☆菊地芳朗教授の発表☆

2023年度から3カ年にわたって、勾玉出土地点の隣接地を発掘し、擦文時代後半（10世紀～11世紀）頃の土器がまとまって出土した。完形の土器が多いことは珍しい事例。勾玉出土墳墓の想定年代である8世紀とズレるが、鉄刀と玉類の分析結果から、墳墓の年代は動かないと考える。南北交易に活躍した島の有力者だろう。周辺に未発見の8世紀頃の遺物がある可能性は決して小さくない。付近の青苗砂丘遺跡や米岡5遺跡に8世紀ころの人間活動の痕跡がある。墳墓を「偉大な始祖の眠る場所」と考えたとすれば、後の人々が始祖を尊ぶ気持ちから土器などを供えたことで、年代差のある完形土器が周囲から出てきたと考えられる。奥尻島は東北と北海道各地を繋ぐ役割があり、さらに水晶丸玉は近畿中央部にあった都との直接的な関係性を示す。朝貢に赴いた際に見返りに宝器として持ち帰ったものか。

シンポジウム
「勾玉と奥尻島」
会場
奥尻町教育委員会
遺物展示

会場準備は福島大学と北海学園大学学生に手伝ってもらいました

奥尻へは、5世紀からはオホーツク文化の南下があり、北の大陸文化の入口として機能するとともに、8世紀には渤海国の朝貢ルートの経由地となった可能性もある。島は東アジアからの玄関口として長く機能したことであろう。

☆福永伸哉特任教授の講演☆

近年、古墳文化が急速に日本海側を北上したことが判明しているが、同時期に奥尻島まで南下してきた北方文化集団との「遭遇」を観点としたい。北海道での古墳文化の遺物として、石狩市から5世紀の石製刀子、礼文島から6世紀の須恵器や紡錘車が出ているように、古墳文化の要素が日本海側に流入し続けている。これには海を長距離移動するオホーツク文化集団の関わりが大きく、奥尻島まで南下した理由が古墳文化人との物資交換だったのではないか。青苗遺跡の勾玉は、北東北の末期古墳のエリアを経由せずに、日本海ルートを通じて5世紀からの古墳文化北上の波により奥尻に到来し、その後も他の玉類が都度流入して島内で集積され、最終的に古墳時代後に都城周辺で入手した水晶丸玉を含めて埋葬されたと想定しても良い。付近の青苗砂丘遺跡では8世紀前葉までオホーツク文化集団が存続しており、その有力者が青苗の高台に葬られたとすれば、青苗墳墓の造営時期は8世紀前葉あたりにしぼるのが整合的である。奥尻島は古墳文化のエリア外であるが、海流が結びつける古墳文化との距離感は意外に近かったのではなかろうか。7世紀後葉～8世紀前葉は、本州西方では古墳時代から律令国家形成へと歴史局面が大きく展開する一方、北方ではオホーツク文化集団が奥尻島を拠点として躍動的となる。その痕跡は島に埋もれているはずである。新たな調査成果を待ちたい。

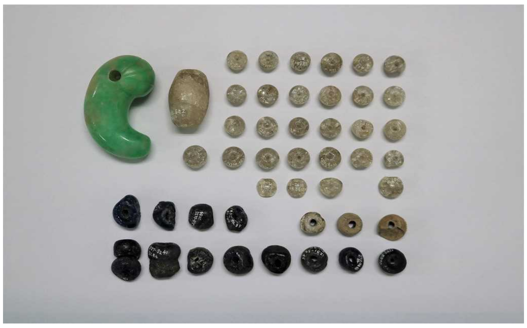
シンポジウム「勾玉と奥尻島」
～青苗遺跡の発掘成果から
大型ヒスイ勾玉の謎にせまる～
Early 前期
Middle 中期
Late 後期
墳丘規模から見た古墳時代の中心と周辺

シンポジウム会場の様子

福島大学教授
菊地 芳朗 氏

福島大学の菊地芳朗教授

大阪大学の福永伸哉特任教授

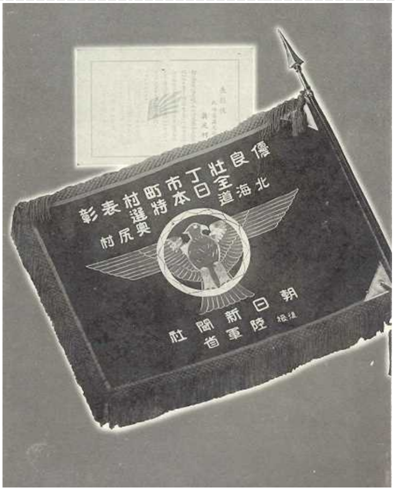


ヒスイ丁字頭勾玉と水晶丸玉などの玉類全点

1977年に青苗遺跡「山本台地」地区「懸崖地点」の「青苗墳墓」から出土した副葬品。玉類のほかに、鉄刀1振、人骨（現存せず）が発見された。

・ヒスイ丁字頭勾玉:3世紀後半～4世紀半ば　1点
・水晶切子玉:7世紀前葉～中葉　1点
・ガラス小玉:6世紀半ば～7世紀中葉　14点
・滑石丸玉:6世紀末～7世紀中葉　3点
・水晶丸玉:8～9世紀　29点

奥尻写真語　第62回　優良壮丁市町村表彰



右ハ全日本優良壮丁市町村審査会ニ於テ昭和四年度ヨリ同八年ニ亘ル五ヶ年間徴兵身躰検査■■■審査ノ結果全日本ヲ■■特選セラルル■■十市町村ノ一ナルコトヲ認メラルル■二之ヲ表彰ス

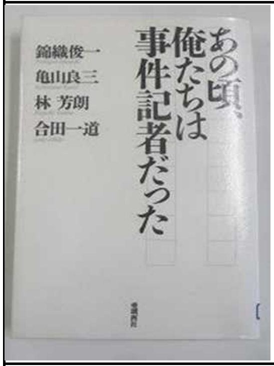
昭和九年三月十日

■■■
■■■
■■■
■■■
■■■

■■■■■
■■■■■
■■■■■
■■■■■
■■■■■

これは優良壮丁の全国表彰を受けた際に授与された賞状と旗を絵葉書にしたものです。賞状の文面によれば、奥尻村は昭和4年から8年までの5カ年間徴兵検査の結果が優れていたことにより、全国から特選となった市町村の一つである、ということが判ります。この話題は本紙第70号でも取り上げていましたが、徴兵検査で甲種合格となることがいかに名誉なことで、その逆はまったく不名誉なことであったことが実感できます。主催は全国紙である朝日新聞社であり、庶民が担った戦争を鼓舞したのは、マスメディアであったことの功罪をも知ることができます。

学芸員の本棚　62冊目



学芸員オススメの一冊をご紹介します。本は海洋研修センター図書室で借りられます。

あの頃、俺たちは事件記者だった
錦織俊一ほか

事件を扱う記者たちが警察署や海上保安本部に出入りして情報を得る。これを「サツ回り」という。他社と抜きつ抜かれつの競争で一喜一憂。根底にあるのは正義を貫くという姿勢。昭和30年代の道新釧路報道部に在籍した4人が熱き青春の記録を数々のエピソードとともに綴る。事件報道の裏話や事の顛末を知れば、新聞記者の悲喜交々が見えてくる。

奥尻のつり　2025年夏秋号

夏枯れが終わり、秋口から奥尻港と宮津港では恒例のサビキ釣りが流行りました。いづれも寒くなる11月初旬頃までは大きめのサバが上がっていました。それを追いかける青物は多くなかった印象です。今年はアオリイカを専門に追いかけている人が来島しなかったので、情報をつかめませんでしたが、墨の痕を見ると、多少は上がっていたようです。11月初旬頃からは、港にカジカが入り始め、釣りごたえのある大きな身体がヌーッと出てきていました。明るい時間帯にも泳いでいるのが見えるほどでした。下旬頃には東風泊方面の人の入りにくい岩場や西海岸の岩場で50cmを超えるクロゾイやアブラコが釣れているとのこと。冬場の釣りシーズンも本格化ですね。くれぐれもご安全に。それぞれで楽しみましょう。

昭和奥尻生活詩　冬休みの生活　第12回

釣石尋常小学校高等科一年生　文集「島の子」第三号

（又、雪降ったな）、と、思い乍ら鼻をすーと、吸っても、息が通らない、（昨日よりも悪くなったなァ、あの藥、良い事を書いてあり乍ら、尚悪くなった、此れから、藥等、のまないで、悪いと言うものを食べるぞ）、と、思っていると、鼻が元通りになって来た。やっぱり藥が、きいたんだ、いちけている俺の心が憎かった。朝御飯を食べてみたが、さっぱりうまくない。父は、「風邪ひいたら、寝れ」、て、言ったけれど、俺は「ーー」、だまって、ストーブの側に居た。ずんずん悪くなる様だ、鼻がつまって頭がおかしくなる時だもある、それで学校へ行った。

つづく

専門図書増やしました

海洋研修センターの図書室に「学芸員オススメ本」のコーナーがあります。奥尻周辺の関連本だけではなく、歴史学や考古学、文化財保存などの専門図書を少しづつ増やしています。特に最近は北海道や東北地方の有名遺跡を判りやすく記述したシリーズ本をそろえています。ぜひ、一度手に取つていただければと思います。

シンポジウムでの「討論」の様子

勾玉シンポジウム盛会

十月二十六日、海洋研修センターにて「勾玉と奥尻島」と題したシンポジウムを開催し、約六〇名の参加者がありました。町民の方が大半でしたが遠くは熊本県からも参加者があり、勾玉と青苗遺跡の注目度の高さを再認識しました。青苗遺跡発掘成果報告や、オホーツク文化の南下と本州古墳文化の北上が「出会った」のが奥尻島だろうというロマンチックなお話がありました。

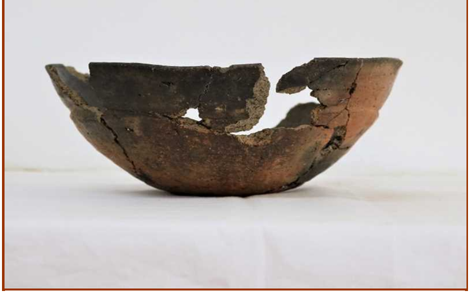
新太之記録（編集後記）

気がつけば勾玉シンポジウムが終わっていました。初めての考古学分野でのシンポジウムで、お客さんの入りが心配でしたが杞憂に終わりました。先に夏期休暇を利用して、関係する時代の遺跡や資料館を見て回つてきました。学生時代に見ていた物でも、もう一度見直すと、勉強になることばかりでした。優等な学生ではなかったもので…。

奥尻島短信　夏・秋・冬

- 今年の夏も暑かったよね
- 夏の長雨による災害あり
- イカつけはやや回復傾向
- 秋は早足で過ぎそうです
- 今年も自宅には冷房なし
- 扇風機だけではキツイか
- イカがつきすぎて規制に
- でもなかなか食えないな
- 道路拡幅で街も変わるね
- 長浜の上の道路も建設中
- 安全運転でお願いします
- ホテル建設地も着工です
- スキー場整備進めてます
- あとは雪が降るだけです

今月の一枚



米岡5遺跡発見の土器　北東北の土師器！？